

林 正一

(はやし しょういち)

略歴 昭和11年生まれ 元金沢市企業局職員
昭和37年「中尾グループ」(昭和54年より
金沢ナカオ山岳会)を結成、約40年指導に
あたる。環境庁自然公園指導員。元石川県
山岳協会事務局長。石川県自然保護協会、
白山の自然を考える会、中高年の登山クラ
ブ・くろゆりクラブ設立を提唱。共著に
『石川県の山』、『白山を歩く』(以上
山と溪谷社刊)、『石川の自然百景』、『
かがの自然』、『医王山の自然ガイド』(
以上石川県監修)、『かが・のと百山』(
金沢ナカオ山岳会編)がある。

林さんには、今回のインタビュー記事におい
て、最初の「餌食」(?)になっていただいた。

シーズンにはそれこそ毎週のように同行して
おり、これまで18年、どれだけ林節を聞いてき
たかしの。それなのに今回照れ照れでイン
ビューし、「聞く」に徹してみても、改めて得心
できたことが多かった。

この特集を発売しておきながら、相手がある
からには、〈蓋あけにゃわからん〉〈無謀かも〉
の不安と疑念にかられていた私。「よし!」の
エネルギー湧いた初体験であった。「聞かぬは、
一生の損!」と、このプロジェクトをやりぬく
決意を固めた。

その後、私は「金大ワングルOB会報編集長」
に徹して、インタビューに励んだつもりである。

たいした雑誌でもないのに、お時間を割いて
頂くことへの気苦労。相槌を打ちつつ、次の質
問へ繋いでいく、思考回路のフル回転。それら
テープを繰り返し聞いて…。金太郎飴ならぬ、
頭のどこを切っても録音テープが弾け出てき
そうな正月休みを過ごした。皆さんに拙い原稿の
校閲をお願いし、ようやく目処がたった。

そんな、自分をちょっと誉めたい時間が戻っ
てきて、テンションが下がった時気付いたのだ。

私は金大ワングルOBと名乗り、ナカオの会
員であることは、「今も山の現役です」と同義
で使ったつもり…。

でももし、この私にインタビューを受けた方
々と林さんが出くわしたら、「うちの会員がご
迷惑をかけまして」と林さんが挨拶しなければ
なくなる。それが世間というものだ。

ようするに、皆さんが突撃レポーターに快く
応じ、きちんと答えて下さったのも、林さんと
いう後ろ盾あってのことであったのだ。

反省!陳謝。そして感謝します。



「俺、ナカオ辞めることになったワ」

「え?!」

予定外の妊娠で休会中の私に、久しぶりの仲
間からの電話は、意外な切り出しで始まった。

聞けば、その1年前から面倒をみることにな
った初心者対象のくろゆりクラブの山行日に、
別の山に登りに行っていた。それが林さんの耳
に入り、今日臨時集會が召集され、売り言葉に
買い言葉でこんな結果になったという。そのK
氏のみならず、くろゆりの面倒をみるために入
会したわけではないとする実力派グループも、
その日脱会することになったとのことだった。
彼らは私とは年代も近く、親しい方の仲間達だ
った。

もう「卒業」はないのだから、今度の仲間達
とはずっとずっと一緒に山に行ける…出産とい
う事態をどう乗り切るか、そのみを難題とし
ていた私には、晴天の霹靂の別れ話であった。
学生時代のようにぼろぼろ涙のこぼれる私に、
今度は林さんから電話があった。何の間にも合
わない私であったのに…。それほどに林さんも
動揺し、苦渋を伴った決裂劇であったのだと思
う。あれからもう16年が過ぎた。

そんな騒動の元となったくろゆりクラブは、
25年間ナカオを主宰し地元ガイド本を上梓して
きた林さんも選定委員に加わった、朝日新聞の
「北陸の百山」紹介企画によりスタートした会
であった。すなわち、彼は40年、山に関わり続
けてきている。

そのような犠牲を払って面倒をみてきたくろ
ゆりクラブも、昨年、どうにか生え抜き会員達
による運営が軌道に乗ったか?のところで、

「もう、ナカオの干渉は無用」

とする役員達により、一般会員には経緯も判ら

ぬまに絶縁となった。

そんな別れを林さんは何度繰り返してきたのだろう。

ワングルの新陳代謝を繰り返しながらの40年と、社会人山岳会の、個人が主宰してきた40年の歴史とは違って当然である。

ワングルは、知識を蓄積できない、常に新人育成に追われてしまう替わり、その時代時代の部員の指向に沿っていくことが可能だった。そうしてきたから、今年の46期生も迎えられている。

一方、社会人山岳会は、「三人寄れば山岳会」「三年もたない山岳会」と揶揄されるごとく、大人ゆえの個性のぶつかり合いがある。さらには、「仕事」「結婚」「子供」と、多くのブレーキを抱え込んでしまう。個人的に主宰していく意志さえあれば…で、続けられるものではない。

どうして、林さんは続けてこられたのだろう？青臭い質問にお答えいただいた。

「仲間に恵まれた」
と林さんは言う。

「去った仲間もいた。しかし、それ以上に、多くの仲間が残ってくれた。」

40年の間にどれだけの人が会から、山から離れていったことであろう。それでも

「続いたのは仲間がいたに尽きる」
のだそうだ。

「登山者は個性が強い。協調性も不足しがちである。しかし、長続きのためには仲間がいる。3人ぐらいでは何の都合で中断するかわからない。10人以上は必要だ。」

ナカオは創立10周年記念に、犀川源流域での活動をまとめ、これが山溪エバンニュー会報奨励賞を受賞。「石川県の山岳研究を進める」とした内規の方向性が評価を受けると同時に、以後の会のカラーを決定づけることになる。その頃から、活動しつつ、記録も出版していくに足る会員数も維持されるようになった。

私自身は、せめて山行の連絡ぐらいは誰かが肩代わりすればいいのに、させればいいのに、と、何度か思ったことがある。そうすれば少しは楽になるのに…。だが、彼には1本1本の電話連絡が仲間の絆との認識であり、面倒ではないらしい。

また、ナカオの登りのスピードにはついていけず、植物名に詳しくもない私が、同行したとて何の間に合うのか？と思ったこともあったが、彼は

「複数の目があれば、いろんなことに気付くから」と、さりげなく言った。

つまりは、去った仲間より、残っている仲間。いろいろな能力を発揮してくれる、違っていてもこそ味わいも出る仲間…そんな前向きの仲間観が、会を維持させてきたようだ。

金沢ナカオ山岳会の「ナカオ」は、医王山の中尾尾根に由来し、そのナカオ新道を開いた4人で、昭和37年に発足している。

「犀星の本に何度も『鹿江りの峡谷』が出てきた。『鹿江りの峡谷』とは何処なのか？豊吉川の上流と見当がついた。しかし、そこへは、福光側からしか道がない。では、金沢側から行ける道を作ろうではないか、が動機だった。」

「あの頃自分達も若かった。医王山の一般ルートが物足りなかった。さりとて遠くへ度々行かれるものでもない。豊吉溪谷の急峻さ、美しさに魅せられた。」

流紋岩質の医王山は、多様な植物に恵まれている。沢や谷筋を好んで歩く青年林さんは変わった花を見かけては興味を持つようになる。また天気構わず出掛けていれば、景色が見えない日は、植物観察に専念することになる。湯原さん（故見上山荘主人）に聞いたり、図鑑で調べたり、さらには大学へ木村さんを訪ねたり…。興味をもてば、さらに遠いにも気付き、隣のページの植物にも目とまる。そうやって、医王山では初めて、それが広がり、石川県では初めて、などの植物の発見者にもなった。

医王山は、林さんに仲間の妙味を教え、山を愛する湯原さんと巡り合わせ、また、植物への造詣をも養った大切な山である。今も、夏のナカオ新道整備と、初冬の納山会は医王山で定例化しており、新年もそこでのわかんハイクでスタートすることが多い。

「会員にも常に言っていることだが、近くに自分の好きな山をおいておくこと。人生にはいくつもの変わり目がある。就職、結婚、子供の誕生…。生活のパターンが変わり、相手の居る人生になる。遠くの山、たとえば北アばかりを対象としていれば、それで山をやめなければならない。近くにあれば、短時間で、夕方から仕事であっても、登りに行ける。」

「とにかく身近な山は馬鹿にしてしまうが、自分は、医王山や犀川源流といった魅力的な山に恵まれ、そこへ登り続けることで、山に関わり続けることができた。」

「いわゆる藪山にも、その山の匂というものがある。その山の輝く時を見つければ、藪山にも十分な楽しみがある。身近な山を馬鹿にせず、



医王山での納山会

魅力を見付けては、楽しむようにした。それが「山が続いた」ということだったのだろう。」

北陸が自然に恵まれているのは自他共に認めるところである。林さんは、それを続けられた根拠としているが、同じく自然の豊かさを認めても、決して行動には移らない圧倒的な層がある。「いつでも行ける」「いつかは行ける」の油断なのだろうか。

山へ行く、それが続く…は、やはり別のファクターもあるようである。

林さんのそもそもの出発点は、どんなシーンだったのだろう。

「山の初めは、父親に連れられてのゼンマイ採りだった。吉次山のあの平沢さん達が開いた道の谷辺り。一面のカタクリの群生だった。子供心にもこんなきれいな所があるのかと感激した。まさに桃源郷だった。思えば、それが、山への興味の出发点であり、植物への関心の出发点だったのかもしれない。」

還暦を過ぎたというのに、林さんは足の回転数も速く、脇道を見れば調べに入り、図書館への文献探しも欠かさない。

それらが山ガイドの執筆のためのみかといえ、生来、何にでも興味を持ち、じっとしてはいられない子供だったのだという。国語の教科書に載っていた笛吹川を渡れば鉄道がある…の話信じ込み、友達と鍋、米抱えて川を渡ったこともあれば、夕刻にまだ医王の里辺りをうろついていて、引き戻されたこともあったのだという。

そんな小さな冒険を好んだやんちゃ坊主は、青年時代には医王山へ通いづめ、ナカオ山岳会への結成へと、自分の道を歩み始めたのだった。

ナカオの30周年記念誌の初めには、中尾新道の道標を手にした26才の精悍な林さんが写っている。林さんの40年に渡る活動、発行本、表彰歴については、本稿の後に付記しておく。

40年の間に、林さんも会員もまぎれもない中高年になった。そして、思いがけぬ中高年登山ブームのただ中にある。かつて基礎訓練を受け「山こそ我が命」としてきた者達が山離れをし、「あれは昔の話」としている一方で、猫も杓子ものごとく山が人で溢れ返っているのだ。

実はナカオも「生涯登山」「社会性ある登山」を目指してきていた。その努力の甲斐あってというより、気づいたら、そこらじゅうの山が人であふれてきたのだった。いつものつもりで出て行くと、もう駐車場が一杯で停められない。

そんな中高年登山ブームは、今逆に、ナカオを縛り始めてきているようである。

すなわち、「犀奥特集号」「ふるさとの山Ⅰ・Ⅱ」「かがのと百山」などの実績は、地元よりむしろ中央の認める所となり、出版依頼を受けるようになる。それは、地元山岳会の雄と認められたことでもあり、「ナカオ山岳会員です」がステータスの響きをもつような快感が我々会員にもあった。

ただし、先の自費出版本が、エッセープラスわずかのガイド、「自分達の活動記録」であったのに対し、依頼本は報酬がある替わり「全面ガイド、期限つき」。山は「趣味」ではなく「仕事・ノルマ」に変貌せざるをえなくなかった。

分県登山ガイドの四分の1を担当させていた私はその仕事で、自分ながら成長したと思う。さすがにガイド本になる責任は重く、そして要領悪く、また写真が思うように撮れず、1山に5回足を運ぶこともあった。

それが本になった時、そして、今も書店に並

ぶのを見る時、嬉しさは格別である。しかしながら、最終責任の重さ・苦痛を担っていたのは林さんであり、私は「その下請けですら、すこぶるきつかった」というしかない。

「今も原稿依頼がきているのだが、『読者が選ぶ百名山』のタイトルで、白山が10位に入っている。従来なら30位がせいぜいだったものが、そんなふうに好みが変わってきている。白山関係の出版物も増えるということになる。白山が愛されることは嬉しい。自分達の活動の評価も嬉しい。収入がありがたいのも事実。ただ…」

「ただ、ガイドは小説とは違う。書いた後に書きっぱなしという訳にはいかない。つまりこちらは書く時の取材だけでなく、その後のメンテナンスにもずっと縛られっぱなしになる。白山周辺から離れられなくなる。そのような宿題を抱え、さらには加齢で体力・脚力に自信がなくなりノルマを頭に浮かべれば、ますます地元の山しか行けない状態に陥る。会員をも縛ることになる」

すなわち山を続け、それが外部評価を受ければ、今度はそのことに拘束される。

山屋には本来、まだ見ぬ山、登ったことのない山への「はやもせかる次の山」的飽くなき中毒症状があるはずである。先はかの深田久弥の句だが、「そこに山があるからだ」よりずっと、日本人のせっかちさ、豊かな自然に恵まれた日本の風土、また修験道の奥駆けにも似た求道要素もこめた名言であると思う。その「次の山」が、林さんの場合、さらに外圧の加わる形で、地元限定されることになっていった。

しかし、そのことは、身近な山が自然豊かな山であってくれてよかったの思いも深めることになったようである。事情があつて山を離れていく人達、それ以上の何とはなしに山から離れてしまった人達を見るにつけ、次の一步が出る自分は恵まれている…。つまり、林さんには、「打たれ強さ」ともいうべき、常にマイナスを上回るプラスの価値を見付けては邁進していけるキャラクターがあった。

ここで誤解され易いのは、「邁進」が相手をねじ伏せ、ただ我が価値観を押しつけ抜くことであったのかということである。ワングルは、世代交替で時代に適應していった。個人である林さんは、家族、仲間といった生身の、感情ある人間との「協調」「誠意」をモットーに、会を維持し続けてきていたのである。

無論、多様な会員がいれば、いわゆる上司への不満も湧く。結局、筆頭の大量脱会劇も

「上司がはいはいボランティアを受けてきて、我々の意見は無視で、利用されるばかり」といった、複数人が会を組織するゆえにもたら



毛勝山。風景写真ばかりで、勢揃い写真は意外に少ない。

されてくる不満であった。

そのような組織内の批判ばかりではない。本も名声も、本人を離れて一人歩きを始める恐ろしさがある。

林さんは山で、一面誰もない人が、本人を目の前にして「林という男は…」の蘊蓄を垂れ始めるのを何度も耳にしたことがあるという。人のねたみ、そねみ。有名人をこき下ろせば、あたかも自分がその上に立てたかのような錯覚…大人でありながら、大人になりきれない、自分勝手のみを正当とする人間が増えているのであろう。

それでもなお

「自分一人ではおそらく続けてはこれなかった。仲間がいてくれたから」
のことばが出てくる林さん。

「独善家」「ナカオ山岳会ではない。林山岳会だ」と陰の非難を浴びつつも、「協調性」を筆頭にあげる林さん。すなわち、短いスパンでの当人にのみ都合のいい仲間、うわべの妥協の協調性というのではなく、いわば、山を通しての「求道」の長い過程の中で、真にそれらを大事にし続けてきたのだった。

「仲間」も「協調性」もありふれた返答であろう。長い濾過の時間を経て、なお残るもの。その意味を真に悟りうる人間はわずかである。

「残念なことに、山が好きになる人は3年ぐらい登ると、それでどこへでも登れる気になってしまう。自分の登りたい山、より遠い山、有名な山…たしかに、そのように登りたい心が湧く人間でなければ、山のように苛酷で、賞もつかないようなスポーツは続けられないであろう。しかし、より遠い山を目ざしていればいづれ続かなくなる。目的のために年寄の会員は面倒とすれば、それは自分が年老いた時、登るべき山

を見つけれなくなるといふことでもある」

「自分の登りたい山は、会の山行のない日に、同じ志向の会員と登りに行けばよいのだ。会には会の方針、会のかかえる仕事がある。様々の年代の会員もいる。会は多くの会員が登れる山を基準ともしていかなければならない。」

「今の自分が登りたい山とは違う…そのことで会に不満を持ったり、あるいは多数の会員がいることを忘れて、自分達の登りたい山へ行けるように会を変質させてしまおうとする…そのように協調性を忘れた者達が、会を離れたり、騒動をおこしてしまう。」

「そうであっても、続けばよいのだ。ただ、自分がなぜ山が続いたのかと省みれば、それは身近な山を大切に、協調性を重んじてきたからだといふしかない。実際、山でなくてもよいのだ。継続していけばわかっていくものがある。社会に還元していくことも。自然を利用させてもらう替わり、大事に守り残していかなければならないことも。」

「人の付き合いにも損得はないのだ。サポートしても、得られるものがある。自分がサポートされる時期もくる。」

「ただ、そうではあっても、老いた人が、家族が単独行では心配だから入会させてくれと依頼してくるのには困っている。会がそこまで背負うわけにはいかないのだ。」

「かつての自分は百名山巡りには感心しなかった。しかし今は、赤線つなぎであろうと百名山であろうと、やりたい、やれると思うジャンルで、続けばよいと思う。山のレパートリーは広い。花、写真、スケッチ、山の歴史…一つでも好むことを長く続けてみれば、それは60になっても70になっても楽しめるものとなり、それぞれの達成感につながるであろう。」

ちなみに、筆頭決裂劇のKさんはその後、通っているジムで初心者向け山岳会を結成。さらには教会牧師からも野外活動リーダーを頼まれて、自分達だけの先鋭登山にはめったに行けなくなった。気のいい彼の主宰者側に立つ悩み・奮闘ぶりを聞く度、まなならぬ世を思う。人と人との出会いにも「匂」がある。その「匂」を味わうには相応の努力、年季も必要であろう。

私もナカオで18年。古い方から数えられる「重鎮」になった。それでいて、林さんの立場を理解できたのは、OB会を再興してから。苦渋を含めて真に理解できるようになったのは、さらに5年後。引継ぎが円滑にいかない事態に陥ってからといってよい。

金大ワングルで育ち、卒業までまっとうした…十分なスクリーニングをうけたはずの集団においてさえ、世代毎の価値観、ワングル観、OB観があり、翻弄された。さらにはOB会歓迎の人達であっても、世話役がでてこない。なぜ？の怒り、悲しみの中で、「会というものは全ての会員の価値観を満足できるものではない」ことを達観し、また、自分も同様に、「利用する立場でしかナカオに関わってこなかった」ことにも気付かされた。

「子をもって知る親心」という。不満を持つはたやすい。我々も、何か一つは面倒を見る立場に立ってみて、自分が受けている様々の恩に気付けるのではなかろうか？そのお返しをして、私達は人生をまっとうしたとすべきであろうと思う。大人になったから、家族を養っているからだけでは、まだ私達は「人の道」を極めてはいない。

さて林さんには、いや林さんなればこそ、これから「老い」へのチャレンジが始まる。少しは老いのブレーキもかけてもらわないと、熟年太りの加算した身はついてはいけない。彼のチャレンジに同行しつつ、「その後」のインタビューも心に秘めて、人生を味わっていききたい。

以下の資料は、林さんが環境庁長官表彰受賞の際の祝賀会パンフ（古源良三氏監修）から、転用した。

《林 正一氏の活動歴》

◎印は金沢ナカオ山岳会関連事項

昭37年9月 医王山・ナカオ新道を開き（林、宮本、吉野、川場の4氏と）一般に供用、「中尾グループ」を結成する。

40年5月 市内高校山岳部と医王山清掃登山実施。清掃登山の草分けとなる。

40年7月◎会名を「山岳会グループ・ナカオ」に改称する。

42年5月◎日地出版「白山」地図発行に協力する。

45年8月◎全日本ユースラリー「白山登山」に協力する。

45年9月◎白山清掃登山を実施する。

46年12月◎白山の自然保護について環境庁に意見書を提出する。

47年4月 環境庁より自然公園指導員に委嘱される。

48年1月◎金沢市等へ犀川源流を石川県の自然保護策に指定するよう要望。後に自然環境保全策に指定される。

49年3月◎“山と溪谷”社のエバニュー会報奨励賞を受賞する。

50年11月 北陸中日新聞「北陸の自然歩道ハイク、医王山コース」を歩くに協力する。

54年7月◎会名を「金沢ナカオ山岳会」に改称する。

54年7月◎石川県健民運動推進本部主催の「はたちの健民登山」に協力しその登山を援護する。以後毎年協力する。

55年7月◎北国文化センター登山教室の指導を担当、以後昭和60年まで続く。

55年8月◎全国レクリエーション大会・白山登山に協力する。

57年6月◎医王山清掃登山を実施する。この年より環境週間に合わせて県内外の清掃登山を実施する。

57年7月 環境庁自然保護局長賞を受ける。

58年4月◎日地の登山地図『白山・医王山』の執筆をナカオが引き継ぐ。

60年4月 朝日新聞連載の『北陸の百山』の記事執筆に協力する。

60年7月 北陸の百山を登る会「くろゆりクラブ」が結成される。相談役に就任。

62年5月◎金沢市文化活動賞を受賞する。

62年5月◎中尾新道を延長し、「ナカオ新道」に改称する。

63年7月 第30回自然公園大会で石川県知事表彰を受ける。

63年10月 春から協力してきた『医王山の自然ガイド』が発行される。(翌年3月ナカオの代行発行で市販される。)

平1年5月◎金沢市の依頼で医王山豊吉川鹿滑りのへつりに、鎖の取り付け工事を施工する。

8月 石川県主催の「第一回自然に親しむつどい」に協力する。

9月 朝日新聞に「在所の山」連載開始、林ほか会員が執筆する。

2年3月 白山の自然保護を目的に設立を提唱してきた「白山の自然を考える会」が発足。

4年10月 山と溪谷社から『日本の山1000』が発行される。石川県関係の山を執筆する。

5年7月◎石川県健民運動推進本部主催の「親子白山登山」に協力しその登山を援護する。以後毎年協力する。

6年4月 『いしかわ人は自然人・特集医王山』に林ほか会員が執筆する。

6年4月 健民運動30周年記念大会において石川県知事より表彰を受ける。

6年4月◎中日文化センターが登山教室を開設、ナカオより講師を派遣する。

6年10月 金沢市長表彰を受ける。

8年5月◎第19回石川テレビ賞を受賞する。

9年4月 山と溪谷社の『白山と北陸の山』の調査を開始する。

9年4月 中日文化センター登山教室の講師に就任する。

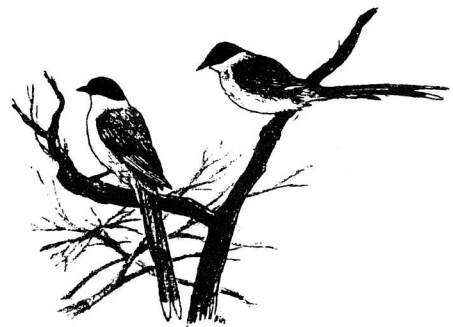
9年7月 第39回全国自然公園大会において環境庁長官表彰を受ける。

9年8月 林ほか会員が調査を進めていた『白山を歩く』が山と溪谷社より発行される。

11年12月 第47回中日社会功労賞を受ける。

《林 正一氏が主に執筆編集した山の本》

本の題名	発行年月日	発行所
①犀奥特集号	昭48・3・31	山岳会グループナカオ
②ふるさとの山特集号	51・3・31	山岳会グループナカオ
③ふるさとの山特集号Ⅱ	54・10・1	金沢ナカオ山岳会
④かが・のと百山	58・4・20	文芸集団
⑤県境踏破 250キロ	62・4・6	能登印刷出版部
⑥医王山の自然ガイド	63・10・1	石川県環境部・金沢市
⑦新かが・のと百山	平3・4・20	高島出版印刷株式会社
⑧白山国立公園とその周辺	4・6・30	高島出版印刷株式会社
⑨加賀白山(地球の風22)	7・6	日地出版株式会社
⑩いしかわの自然百景	8・3・30	株式会社橋本確文堂
⑪分県登山ガイド石川県の山	8・5・10	株式会社 山と溪谷社
⑫白山眺望登山・泰澄大師 ゆかりの地をたずねて	8・10・10	高島出版印刷株式会社
⑬白山を歩く	9・8・30	株式会社 山と溪谷社
⑭白山と北陸の山	12・8	株式会社 山と溪谷社
⑮石川の自然公園 医王山	13・3・10	金沢ナカオ山岳会



オナガ

《林 正一氏の受賞歴》

1、昭和57年7月21日 環境庁自然保護局長表彰

あなたは長年にわたり自然公園の利用指導を通じ 動植物の保護自然環境の美化清掃及び利用者の事故防止等適正な利用の増進に寄与されました。ここにその功績をたたえ功労記章を贈り表彰します

環境庁自然保護局長 正田 泰文

2、昭和62年5月20日 金沢文化活動賞

貴会の多年にわたる誠実かつ真摯な調査登山自然保護活動は本市の市民文化の向上に寄与することまことに顕著なものとあります よってここに金沢文化活動賞を贈りこれを表彰します

金沢市長 江川 昇

3、昭和63年7月23日 石川県知事表彰

あなた 多年にわたり自然公園の保護と適正な利用の推進に尽力し自然保護思想の普及啓蒙に寄与されました その功績はまことに顕著であります よって第30回自然公園大会にあたり これを表彰します

石川県知事 中西 陽一

4、平成6年4月24日 石川県知事表彰

あなたは健民運動の実践活動に尽力され その功績はまことに顕著であり 他の模範とするところであります よって健民運動30周年記念大会にあたり これを表彰します

石川県知事 谷本 正憲

5、平成6年10月18日 金沢市長表彰

あなたは日頃職務に精励するかたわら 長年にわたりボランティア（社会教育）活動に尽力してこられました このことは他の職員の模範となるものであり ここに表彰します

金沢市長 山出 保

6、平成8年5月17日 石川テレビ賞

貴会は地域の登山道の開拓や白山調査登山の活動を出版を通じ紹介するなど登山界の振興と自然愛護の啓蒙に尽くされています その活動に深く敬意を表し ここに第19回石川テレビ賞を贈り その功績を讃えます

ITCクラブ代表委員 金子 曾政

石川テレビ放送株式会社代表取締役社長 榎本 喬

7、平成9年7月23日 環境庁長官表彰

貴殿は多年にわたり白山国立公園において利用者の指導に努められるとともに 美化清掃に尽力され その功績は誠に顕著なものとあります よって第39回自然公園大会にあたり表彰します

国務大臣 環境庁長官 石井 道子

8、平成11年12月3日 中日社会功労賞

あなたは岳人ならではの豊かな経験から奉仕の自然公園指導員として 白山国立公園を中心にゴミ持ち帰り運動や安全登山の先達となられ 自然保護思想の啓発に尽くされました。ここに第47回中日社会功労賞を贈り、その功績をたたえます

中日新聞社代表取締役社長 白井 文吾

